

# 青年期男女における両親およびきょうだいに対する 接触回避

羽成隆司\*・河野和明\*\*・伊藤君男\*\*

Contact Avoidance in Relation to Parents and Siblings in Young Adults

Takashi HANARI, Kazuaki KAWANO and Kimio ITO

## Summary

This study analyzed contact avoidance in relation to parents and siblings in young adults. Undergraduates (N=695) participated in a questionnaire survey. They were asked to think about their fathers, mothers, brothers, sisters, male friends, and female friends, and rate the extent to which they did not wish to contact with each individual in eight situations. Female respondents displayed considerably greater contact avoidance in relation to male individuals than in relation to female individuals among their family members and friends. On the other hand, male respondents displayed almost the same degree of contact avoidance in relation to both male and female individuals. It was confirmed that the degree of contact avoidance in relation to various individuals, including family members, were consistent with characteristics of each sex found in previous studies. The results were discussed with reference to the possibility of a sexual-defense mechanism coming into play when women deal with fathers and brothers, and also with reference to the greater ease of contact with mothers and sisters found especially in female respondents.

Key words: contact avoidance, family members, sex difference, sexual defense

## 問 題

これまでの対人魅力に関連する多くの研究では、ポジティブな感情や態度の特徴が主たる分析の対象であった。しかし、ネガティブな感情や態度も、対人関係の調整に大きな役

---

\* 文化情報学部 メディア情報学科

\*\* 東海学園大学心理学部 心理学科

割を果たしていると考えられる。たとえば、自身にとって望ましくない人物を嫌悪したり、接触を控えたりといった対人的な回避傾向は、自身や社会秩序を守る機能をもつ場合がある (Olatunji & McKay, 2008; 堀越監修, 2014; Rozin, Haidt, & McCauley, 2000)。対人的な回避傾向の特徴を検討することは、重要な課題の一つであると思われる。

ここでは、Kawano, Hanari, & Ito (2011) や河野・羽成・伊藤 (2012) と同じく、対象人物の身体に対する直接または間接的な接触を回避する心理的傾向を、接触回避と呼ぶこととする。Kawano, et al. (2011), 河野・羽成・伊藤 (2015) では、大学生男女を調査対象として、何らかのスティグマの特徴をもっている人物、自身が嫌悪している人物、友人、恋愛対象者等に対する接触回避の程度が測定され、回答者および対象者の性によって、接触回避の現れ方が異なることが確認された。すなわち、上記研究では、1) スティグマ的人物、嫌悪人物、友人に対しては、男性回答者は対象者の性に関わりなく同程度の接触回避を示したのに対して、女性回答者は、女性対象者にはより受容的で、男性対象者にはより回避的な傾向を示すこと、2) 恋愛対象者<sup>1)</sup>に対しては、男性回答者、女性回答者いずれも異性の友人に比べて接触回避が低下すること、3) この低下の程度は女性回答者でより顕著であるが、それでも、女性回答者の恋愛対象者への接触回避は、女性友人への接触回避より高いこと等が見いだされた。

上記の結果は、女性回答者は、女性対象者に受容的である一方、男性対象者には、それが恋愛対象者であっても女性友人よりも接触回避が高いなど、より回避的・防衛的であることを示している。河野ら (2015) では、これに関連する要因として、女性に求められる性役割、共感性や自己開示の高さ、親和的な対人接触機会の多さ等の社会的・文化的要因 (安達・上地・浅川, 1985; Baron-Cohen, Knickmeyer, & Belmonte, 2005; Derlega, Metts, Petronio, & Margulis, 1993 齊藤監訳, 1999) や、女性における性的防衛の必要性 (Cartright, 2000; Haselton & Buss, 2000)<sup>2)</sup> といった生物学的要因の可能性を指摘した。

それでは、一般には発達初期から長期にわたって親密な関係にある親やきょうだいといった肉親に対する接触回避はどのように生じているのであろうか。その性に関わらず、通常肉親は友人や恋愛対象者と同等以上に親密かつ信頼している対象である。男女大学生を対象に行った調査で、肉親に対する尊敬や愛情の程度は友人以上であったことが確認されている (羽成・河野・伊藤, 2009)。そのため、女性回答者であっても、肉親に対しては性役割の影響や性的防衛の必要性等は関与しにくいように思われる。この場合、女性回答者は、男女いずれの肉親に対しても同程度の接触回避を示すと予想される。ただし、肉親は最も血縁関係の強い者であるため、性的な接触が最も回避されるべき対象でもある。もし、インセスト回避 (Lieberman & Antfolk, 2016) のような生物学的な要因が潜在的に作用していれば、女性回答者は男性の肉親に対してより強い接触回避を示すことが予想される。

本研究では、Kawano, et al. (2011), 河野ら (2015) と同様の方法にもとづいて、両親およびきょうだいに対する身体の接触回避がどのように生じているかを、性差を中心に分析した。質問紙調査では、父親・母親、男きょうだい・女きょうだい、および、男性友人・女性友人に対する対人感情と、彼らにたいする接触回避の程度を測定した。

## 方 法

### 調査対象

大学の学部学生695名（286名の男性，409名の女性）が質問紙調査に参加した。年齢の範囲は18歳～32歳で，平均年齢は20.07歳（SD=1.30）であった。

### 質問紙

質問紙では，父親，母親，同性きょうだい，異性きょうだい，および，同性と異性の友人に対する接触回避と対人感情を測定した。友人については，実在する男性と女性の友人を一人ずつ想起させ，彼らのイニシャル（例：I. K.）を記入させた。

まず，父親・母親・きょうだいについては，その存在の有無と，実の肉親であるか義理の肉親であるかを尋ねた。父親と母親がいない場合には，いと仮定して回答させた。きょうだがいる場合は，「兄」「弟」「姉」「妹」のいずれであるのかを尋ねた。きょうだいがいない場合には回答させなかった。

質問項目は，河野ら（2015）と同様に，各対象者への対人感情の基本的特徴と接触回避を測定するもので構成されていた。

対人感情については，齊藤（1990）を参考に，2種類のポジティブ感情（尊敬，愛情）と2種類のネガティブ感情（軽蔑，嫌悪）を取り上げ，その程度を7段階（1. まったく感じない～7. 非常に感じる）で評定させた。

接触回避の測定には，Kawano, et al. (2011)，河野ら（2015）と同一の尺度を使用した。すなわち，直接または間接的な身体接触場面を想定し，それぞれの場面において，その人物と接触することをどの程度したくないと感じるかを，7段階（1. まったく平気～7. 非常にしたくない）で評定させる尺度であった。想定された身体接触場面は以下の8種類であった。(1)じかに箸を入れて同じ鍋料理を食べる，(2)握手する，(3)小さなテーブルで向かい合って話をする，(4)その人が長時間座ったイスに座る，(5)その人がずっと使っていたコップで飲み物を飲む，(6)人工呼吸で自分の口からその人の口に息を吹き込む，(7)その人が入った後のお風呂に入る，(8)その人が使った後の洋式トイレに入って大用を足す。これら8項目の合計点を接触回避得点として使用した。 $\alpha$ 係数は，父親で.90，母親で.88，姉妹で.90，兄弟で.88，同性の友人で.85，異性の友人で.88であり，尺度の一貫性は確認された。

### 手続き

本論文の著者がそれぞれ担当する授業の終了後，授業への参加者に質問紙調査を実施した。参加者には質問項目すべてについて率直に回答することを求めたが，倫理的配慮を含めて以下に言及した。すなわち，質問紙には，質問文を読んだ際や，回答している際に不快感をもつことがあるかもしれない項目が含まれていること，そのため，ボランティアとして参加する意思を表明した後であっても，回答はまったくの任意であって，はじめから回答を拒否すること，あるいは，回答をはじめた後で，いつでも回答を中止することが可能であること，さらに，無記名での回答のため，回答の中断や拒否によって不利益を被ることはない点を強調した。以上の説明は質問紙の表紙にも記述されていた。参加者の匿名

性を確保するために、事前の署名は求めなかった。調査実施の翌週の授業時に、デブリーフィングを行った。本研究計画は、第二、第三著者の所属する大学の倫理委員会にて審査を受け、許可を受けた（東海学園大学研究倫理委員会受付番号 22-9）。

## 結果と考察

本研究では、同一回答者においてそれぞれの対象人物（親、きょうだい、友人）への評定値の差異を比較した。そのため、まず、全回答者の中から、男性きょうだいと女性きょうだいの両者をもつ回答者のみを選別した。さらに、この回答者から、父親と母親の両方またはいずれかがいない回答者、義理の両親と義理のきょうだいを有する回答者を除外した。最終的に分析対象となった回答者は118名（52名の男性、66名の女性）<sup>3)</sup>、年齢範囲18歳～24歳、平均年齢20.08歳（SD=1.08）であった。

各対象人物への4つの対人感情それぞれについて、回答者間の性差を *t* 検定によって確認した。結果を表1に示す。父親を除くすべての対象人物において、男性回答者より女性回答者の方が愛情の評定値が有意に高かった。また、女性回答者の方が、女性きょうだい、男性友人、女性友人への尊敬が高く、女性友人への嫌悪が低かった。このように女性回答者の方がより肯定的な対人感情を示す傾向があるが、対象人物を肉親に限定すると、愛情以外では回答者の性による対人感情の違いは少ないと思われる。

各対象に対する接触回避得点の平均値を表2に示す。友人に対する接触回避得点は河野ら（2015）でも測定されているが、ほぼ同程度の数値が本研究でも再現されている。接触回避得点について、混合計画3要因分散分析（回答者の性2水準：男・女×対象者の種類3水準：両親・きょうだい・友人×対象者の性2水準：男・女）を実施した。回答者の性と対象者の性の交互作用、対象者の種類と対象者の性の交互作用が有意であった（順に、 $F(1, 116)=48.79, p<.01; \eta_p^2=.30$ ;  $F(2, 232)=8.68, p<.01; \eta_p^2=.07$ ）。

回答者の性と対象者の性に関して単純主効果検定を行った結果、男性対象者において、回答者の性の単純主効果が有意傾向であった（ $F(1, 116)=2.70, p=.103; \eta_p^2=.02$ ）。女性対象者において、回答者の性の単純主効果が有意であった（ $F(1, 116)=11.33, p<.01; \eta_p^2=.09$ ）。これらの結果は、男性対象者は男性回答者より女性回答者から、一方、女性対象者は女性回答者より男性回答者からより回避されていることを示している。

女性回答者において対象者の性の単純主効果が有意であったが（ $F(1, 116)=135.00, p<.01; \eta_p^2=.54$ ）、男性回答者では対象者の性の単純主効果は有意でなかった。この結果は、女性回答者は、女性の対象人物よりも男性の対象人物を回避すること、一方、男性回答者は対象人物の性によって接触回避の程度を変化させないことを示している。

対象人物の種類と対象人物の性についての単純主効果検定では、男性対象人物において対象人物の種類単純主効果が有意であった（ $F(2, 232)=9.37, p<.01; \eta_p^2=.07$ ）。多重比較を行ったところ、父親は男きょうだいや男性友人よりも有意に高く、男性友人は男きょうだいよりも有意に高かった。つまり、接触回避の程度は、父親>男性友人>男きょうだいの順で高かった。女性対象人物においては対象人物の種類単純主効果は有意ではなかった。

肉親への対人感情については女性回答者の方がより肯定的な対人感情を示す傾向が一部

青年期男女における両親およびきょうだいに対する接触回避

表1 親, きょうだい, 友人に対する感情の平均値  
( ) 内は標準偏差

対象		男性回答者	女性回答者	自由度	t 値	p
父親	尊敬	5.10(1.69)	5.14(1.58)	116	0.13	n.s.
	愛情	4.42(1.68)	4.89(1.57)	116	1.57	n.s.
	軽蔑	3.33(1.97)	2.89(1.82)	116	1.24	n.s.
	嫌悪	3.42(2.03)	2.97(1.73)	116	1.31	n.s.
母親	尊敬	5.42(1.71)	5.62(1.40)	116	0.69	n.s.
	愛情	5.33(1.13)	5.97(1.10)	116	3.12	**
	軽蔑	2.29(1.55)	2.06(1.42)	116	0.83	n.s.
	嫌悪	2.35(1.48)	1.98(1.35)	116	1.38	n.s.
兄・弟	尊敬	4.10(1.81)	4.45(1.52)	116	1.17	n.s.
	愛情	4.69(1.44)	5.35(1.44)	116	2.46	**
	軽蔑	2.79(1.64)	2.47(1.67)	116	1.04	n.s.
	嫌悪	2.52(1.60)	2.38(1.63)	116	0.47	n.s.
姉・妹	尊敬	3.77(1.98)	4.61(1.72)	116	2.46	**
	愛情	4.44(1.69)	5.53(1.36)	116	3.88	**
	軽蔑	2.88(1.65)	2.36(1.68)	116	1.69	n.s.
	嫌悪	2.75(1.61)	2.26(1.75)	116	1.57	n.s.
男性友人	尊敬	4.25(1.68)	4.86(1.48)	116	2.11	**
	愛情	4.00(1.56)	4.65(1.32)	116	2.46	**
	軽蔑	2.19(1.46)	2.12(1.31)	116	0.28	n.s.
	嫌悪	1.94(1.27)	1.98(1.10)	116	0.19	n.s.
女性友人	尊敬	4.40(1.42)	5.21(1.14)	116	3.43	**
	愛情	4.54(1.51)	5.50(1.38)	116	3.60	**
	軽蔑	2.17(1.31)	1.85(2.30)	106.5	0.96	n.s.
	嫌悪	2.08(1.19)	1.64(1.00)	116	2.19	**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表2 親, きょうだい, 友人に対する接触回避得点の平均値  
( ) 内は標準偏差

対象	男性回答者	女性回答者
父親	19.37 (12.29)	21.58 (11.38)
母親	16.46 (8.85)	12.52 (5.54)
兄・弟	15.94 (8.84)	17.35 (9.52)
姉・妹	16.63 (9.08)	13.15 (9.13)
男性友人	16.48 (8.26)	20.42 (8.64)
女性友人	16.69 (8.50)	12.50 (6.00)

に見られたのみであり、対人感情について回答者の性差は少ないと思われる。しかし、肉親への接触回避については明確な性差が認められた。すなわち、女性回答者では女性の肉親より男性の肉親への接触回避の程度が高い（女性の対象人物への接触回避が低い）が、男性回答者では対象人物の性による違いがほとんど見られなかった。このような回答者と対象人物の性に関わる特徴の違いは Kawano, et al. (2011) や河野ら (2015) と同様であり、肉親を含めた様々な対象人物への接触回避について、一貫した性差の特徴が確認されたとと言える。

女性回答者が男性の肉親に対してより高い接触回避を示したことについては、河野ら (2015) でも指摘した性的防衛といった生物学的な要因が関与していた可能性もある。配偶者選択に関わる失敗のコストが男性より大きい女性の方が、性的防衛の必要性も高くなると予想される (Cartright, 2000; Haselton & Buss, 2000)。肉親に対しては性的防衛の必要がないように思われるが、インセスト回避のためには肉親との性的な接触は回避されなければならない。インセスト回避は男性にも必要なので、ウェスターマーク効果 (Westermarck, 1925) のような直接的な性的嫌悪は男女ともに生じる。しかし、性的防衛の必要性が高い女性では日常生活での接触にも敏感となり、それが男性の肉親に対する接触回避に反映されるのかもしれない。

女性回答者の女性の対象人物に対する受容性の高さが肉親においても確認されたことについては、女性どうしの共感性や自己開示の高さ、あるいは日常的な身体接触機会の多さ等、親和的なコミュニケーションの傾向と関連している可能性もあるので、今後はこれらを変数にした分析を行う必要があるだろう。

男性回答者において父親への接触回避が男きょうだいや友人より高かった要因も含め、さらに検討が必要ないくつかの問題があるが、Kawano, et al. (2011)、河野ら (2015) と本研究の結果によって、肉親を含めた様々な対象人物への接触回避に関する性差の一貫性が確認された。ただし、これらの結果は日本人大学生という限定されたサンプルにもとづくものであり、その一般性については慎重に検討されなければならない。今後は、性的防衛の必要性が関与しにくいと思われる幼児を対象人物とした検討や、回答者を大学生以外の年代に広げて、発達段階との関連についての分析等を行っていきたい。

## 注

- 1) 恋愛対象者の分析においては、異性の恋愛対象を想定した回答に限定した。
- 2) 出産・妊娠・子育ての大半を担う女性は、配偶者選択における失敗のコストが非常に大きいので、男性より配偶者選択に慎重になる必要がある。その結果、男性に対して回避的・防衛的な戦略をとることが合理的であると考えられる。一方、男性では女性に対してこのような戦略をとる必要性は低いと考えられる。
- 3) 回答者の選別により分析の対象数が少なくなったが、友人への接触回避得点 (表 2) の平均値と標準偏差は、河野ら (2015) で測定されたものとほぼ同じであった (河野ら [2015] での分析の対象数は、288名 [男性110名、女性178名])。

### 引用文献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 (1985) 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究(1)—日本版 BSRI 作成の試み— 日本教育心理学会第27回総会 発表論文集, 484-485.
- Baron-Cohen, S., Knickmeyer, R. C., & Belmonte, M. K. (2005) Sex differences in the brain: Implications for explaining autism. *Science*, 310, 819-823.
- Cartwright, J. (2000) *Evolution and human behaviour*. New York: Palgrave.
- Derlega, V. L., Metts, S., Petronio, S., & Margulis, S. T. (1993) *Self-disclosure*. London: Sage. (ダーレガ, V. J., メッツ, S., ペトロニオ, S., マーグリッス, S. T. 齊藤勇(監訳) (1999) 人が心を開くとき・閉ざすとき—自己開示の心理学— 金子書房)
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2009) 父母やきょうだいに対する嫌悪感はいんせスト回避の表れか? 椛山女学園大学文化情報学部紀要, 第9巻第2号, 45-53.
- Haselton, M. G., & Buss, D. M. (2000) Error management theory: A new perspective on biases in cross-sex mind reading. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 81-91.
- Kawano, K., Hanari, T., & Ito, K. (2011) Contact avoidance toward people with stigmatized attributes: Mate choice. *Psychological Reports*, 109, 639-648.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 (2012) 「接触回避尺度」開発の試み 東海学園大学紀要第18巻, 155-161.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 (2015) 恋愛対象者に対する接触回避 パーソナリティ研究, 24, 95-101.
- Lieberman, D., & Antfolk, J. (2016) Human Sexuality and Inbreeding Avoidance. In D. Buss (Ed.), *The Handbook of Evolutionary Psychology* (pp. 444-461).
- Olatunji, B. O., & McKay, D. (Eds.) (2008) *Disgust and its disorders: Theory, assessment, and treatment implications*. Washington, DC: American Psychological Association. (オラタンジ, B. O., マッケイ, D.(編), 堀越勝(監修), 今田純雄・岩佐和典(監訳) (2014) 嫌悪とその関連障害—理論・アセスメント・臨床的示唆— 北大路書房)
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. (2000) Disgust. In M. Lewis & S. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions*, 2nd ed. New York: Guilford Press. pp. 637-653.
- Westermarck, E. A. (1925) *The history of human marriage*, 5th ed. London: Macmillan.